外国語教育への思いと期待

―― 鼻高 1964 年組織委員会英語通訳奮闘記 ――

加藤　忠明*

はじめに

1941 年に戦争状態に陥った日本は，五輪を返上した。再び返上することは最早あってはならないのだが。百万票も得票数がヒラリー・クリントンより少なかったのに，選挙人制度という白人に比較的有利な制度の結果，米国次期大統領にはトランプ氏が選ばれた。彼は「日本の平和を，アメリカ人が守る必要はない」とまで言う。同じく総得票数を下回ったジョージWブッシュで何が起きたか。彼は，対抗者のアルゴアに勝ち大統領に選ばれた。イラク戦争に突き進み，テロリスト集団ＩＳを生んだ。「極東の軍備は自前でやれ」と言って憚らないトランプ氏のもと，日本が無事でいられるのかという懸念が生まれてしまった。努々，二度と極東に戦争が起きてはならない。オリンピックは平和の祭典，若人が力を競うスポーツの最高峰である。五輪は世界中が期待と関心を持っている。しっかりと実施されることを祈る。

1964 年の東京オリンピックは，日本中に興奮と感動を引き起こした。1 ドルが 360 円の時代，国際化の前の時代である。小さな投資で，新幹線が生まれ，高速道路が生まれ日本経済は大きく伸長した。当時と，グローバル化された今とは，状況は大きく異なる。日本は，高齢化社会をむかえ，人口減が始まった。四分の一は，65 歳以上の高齢者である。90 歳以上まで生きる人は，珍しくなくなってきた。高齢者は，東京五輪までは生きたいと希望を持っている。若いアスリートは，五輪を目指し，頑張っている。2016 年リオ五輪での日本人選手の大活躍に大いに沸いた記憶がどの人の心にも刻まれている。次の東京五輪では，それ以上の活躍を期待したい。一方，人口減の高齢化時代，成熟社会の日本がやるのは，震災復興が先ではないかと冷めた論調もある。しかし引き受けた以上は，大いに，この機会に，日本発展の場として欲しい。私の一番の希望は，若者が，五輪前のこの機会に是非，英語を習得して欲しいというものである。（この随想も組織委員会英語通訳として 1964 年に携わった年寄りの自慢話に結局なってしまうので，敢えて「鼻高云々」と明記した）

メディアの進歩

1960年以前の五輪はラジオで放送を聞いたり，結果を知る時代，1960 年のローマ五輪は白黒テレビで結果を知る時代。ケネデイ米大統領の暗殺が，日米初放送で報じられたのも白黒テレビの時代，その後，カラーテレビが生まれ，ビデオで録画ができるようになり，音声多重放送が聞けるようになり，大画面テレビが一般的となり，液晶テレビが生まれ，高精度の画像で生中継が見られるようになった。それが，今や，ネットで結果をいち早く聞いたり，見られるようにもなってきた。新聞も勢いを失いつつあり，テレビも，ネットに取って代わられつつある。我々は日進月歩の時代を生きている。

2016 年 11 月 30 日受付
* 江戸川大学 情報文化学科名誉教授　ビジネス英語，実用英語，英語教授法

しかしながら，日本は，国際社会と言えようか。日本語だけで済むことは有難い。しかし，それは，一言語の閉鎖社会でもある。外国からの観光客が2016年には2,400万人となり，地方でも外国の方々が生活するのを見ることは，全国津々浦々，かなり，一般的となっている。それなりに，日本人の良さは理解されるようである。外国人が日本語を積極的に話してくれる。「おもいやり」も「おもてなし」も，言葉がなくても通じることは多い。

しかし，言語は，絶対，最優先事項である。11月のＮＨＫテレビでオーストラリアのとある小学校が外国語学習で，日本語を採用して，日本人教員が，地理を日本語で教え，算盤を日本語で教えている姿が映されていた。導入後3年たつその学校で，日本語を教えたクラスは，外国語を教えなかったクラスより，圧倒的に，英語読解能力が優れていることが示された。決して，「小学校から，英語は早すぎるよ」と簡単に言えない事例ではないか。

外国語軽視は，日本社会では著しい。英語を聞くと目くじらを立てる人とか，「かっこつけて」という人が多い。海外から来たある外国人は，「日本人は，外国語音痴だ」とまで言う。「外国人が日本語を習うのと同様，日本人は，外国人と英語で話そうよ」と是非言いたい。日本語で話しては，英語力が身につかない。絶対，「勿体ない」からである。東京五輪を前に，少しも英会話ブームが再燃しない。

私と英語学習

60年代の昔は，欧米人は，日本語を英語より，劣った言語としていたからなのか，日本に長く住んでいても，決して，日本語を話さなかった。そこで，外国人を見ると電車の中で，英語で話しかけ，英語の練習をした。時に，ロシア語が返ってくるので驚いた。イングランド人かと聞くと，スコットランド人と言われ戸惑った。テープレコーダーは，高校に一台あるのみで，リンガフォンの英米語をレコードで聴くしか，英語に接することができなかった。発音練習も，テープがある訳ではないので，発音記号を読んで「このような感じかな」であった。慶應志木高校の英語研究会は，英語を話す会であった。4高校英語デイスカッションでは，立教高校，青山学院，立教女学院の生徒と決められたテーマについて英語で討論する機会であった。一橋中卒の私は，英数は不得意科目。英語は，好きな女の子の入った青山学院と提携していた英語研究会に入り高校から自学学習を始めた。その子とは一度ほど会うことができた程度であった。英語は，自分で参考書を読み進める。2年になった。未だ覚束ないレベルである。後輩に天才がいた。帰国子女以上に，英語を操る男がいた。彼は，ドイツ語も使った。兄は，私と同学年，早稲田高等学院，お宅を訪れるとすべて，英語で話した。フランス語も使う。長兄は，後に東京五輪の組織委員会通訳を務め一流銀行に入った。姉は，私が4年次に，オーストラリア大使館の晴海での国際見本市出展の通訳に私を紹介してくれた。父親は，校長先生の一家。母親は，百歳で，一昨年，この世を去った。日吉にある慶応高校でのスピーチコンテストでも，優秀な天才たちに会った。2年の私の英会話力は低レベルのままだったが，それなりに，話せるようにはなった。3年生になると，英語の神様と，同級生達には言われるようになった。学内テストで英語を準備する必要がないので，他の科目に専念できる。第一希望の経済学部に進学できた。一方，書類選考も含め30倍になる組織委員会英語通訳の試験に受かり，19歳という最年少の一人での東京五輪の公式通訳（英語）となれたのは正に幸運としか言えない。

世界の中の一言語としての英語

64年当時は，各国，それぞれの言語で，共通語はなかった。公用語として，英，仏，独，西，露の五言語があったが，他の国でも2言語を話す人は多くはなかった。日本は，初めて，欧米以外で行われるアジア最初の国として，各国語の通訳確保は，喫緊の課題であった。（やがて，英語を話す人も増えて，長野冬季オリンピックでは，ボランテイアが通訳として活躍した。（2020年もそ

うなるようである。国際化で，日本でも英語を話す人が多くなったからできたことであった。その間，英語は世界の共通言語となった）東京が開催国に選ばれた際に，当時のロゲ会長は，「(2度目の夏季オリンピック開催,)経験に学んで欲しい」としていた。当時の体験をどう生かそうとしているのか，問題点は，何だったのであろうか。

一般公募の書類選考で，３人に１人に絞られた時，最年少グループの私が残れたのは，津田塾の英会話教室の米人先生に，推薦人になって頂いた事が，大きかった。18歳で，合格したのは，他には，親の仕事の関係で現地の中学，高校で学んでいた僅かな帰国子女だけだった。ＡＦＳで高校1年留学して帰ってきた学生は，1学年上であった。書類選考後の英語テストで，10倍の難関を潜り抜けられたのも運が大きかった。

当初の役割は,団長付き通訳というものだった。ところが，大学の英語会に所属した私は，ＡＦＳ留学生だった1年先輩と，通訳のオリエンテーションを受けていた際，3日目は，その先輩とクラブ活動の為，参加できなくなって先輩の言うまま欠席してしまった。その結果,閑職の接伴（宿舎）に回された。学生気分は良くない。(大学を卒業して仕事についても,学生気分のままの人がいる。これは通用しない。社会に入ったら責任は大きい。プロとして仕事をする自覚が大事である）以下，暫く，慶應義塾大学英語会機関誌（1965年春）の拙稿をほぼ原文のまま記す。

“オリンピックと私”
　　通訳として参加して感じたこと

オリンピックが終わってから五か月が経った。最近の[あの内容で良いのかという]映画問題で，再び脚光を浴びることとなった。僕達は未だオリンピックを忘れていないし各個人が感じ得たものを，一生残していくだろう。これからも，4年ごとの祭典は開催国の国民に，記憶，感動をよみがえらせてくれるだろう。

通訳として，この時活動できたのは，大変良い思い出にもなり，又，諸々勉強したかと思う。ある国の白人（今は差別用語？）老紳士は，「わしは今まで，続けて7回もオリンピックを見にきてる。東京は遠かったが，オリンピックは素晴らしい」と言っていた。でも,過大評価はできないし，しょせん，オリンピックは，夢で，只の祭典でしかない。

当時，オリンピック開催決定後英会話のブームが巻き起こった。(今は，全く冷めており，若者が必死に英語習得を志しているとは言えないことを危惧する）日本の英語教育の狭さを，くつがえし，実用性が貴ばれたことは良かったが，結局，趣味の英語としてしか，開眼出来なかった。外国の文芸を，僕達の先輩は日本語に吸収しきった所に我々の強さがあるとはいえ，植民地化された国の人民が，英語，フランス語，スペイン語を話すことを思い，又，世界が少なくともマスコミを通じては狭くなっている時,これで良いのだろうか。オリンピックでは，日本人は発信できていない。「言わ猿」「聞か猿」であった。

私達公式通訳は，英語340名，フランス語140名，スペイン語80名，ドイツ語60名，ロシア語50名という割合だったが，英語，ドイツ語が書類選考の後も10倍以上の申込者数，あとは応募者数が満たなかったり，又は少ない数であった。これは，これらの言語では下手な通訳が生まれたと言うことではなく，その学習者の数が少ないと言う事で，残念な事であると思う。

面白い経験がいくつかあった。

最初，役員宿舎勤務として渉外部から，品川東京観光ホテルに派遣されたのだった。私たちの役目は，役員たちの手となり，足となる事で，又ガイド的に日本の紹介をすることだった。役員はドイツから二人，一人は英語，一人はフランス語を使った。英語を使う方は，愛想が良い人で，ドイツの交換バッジや，面白い格好の酒コップを貰った。もう一人の方とは意思が通じないので無愛想な人だと勝手に決めてしまった。東ドイツから宿舎に入る予定の役員は来なかった。イタリアから一人，非常に優雅で上品な女性がやって来た。

彼女はオリンピック期間中に名古屋へ旅行をしにいったが，別れ際に，どっさりプレゼントをも

らった。（数年前，水泳指導を仰ぐ，60 年ローマ五輪銅メダリストの田中 [当時] 聰子先生にイタリアのカラフルなローマ五輪ショールを差し上げた）ユーゴスラビア [当時] のバスケットボール協会会長は，背が非常に高いが，気は優しくて力持ちで会うといつもニコニコしていた。病気に罹ってしまったが，頑張っていた。日本の気候がお気に召さなかったのかな。イランの人は非常に遠慮深くこちらの申し出をみんな辞退していた。頂いたペスターチ（いま日本に普通にある）という落花生のような物は，酸っぱい味が適当に効いて，おいしいおいしいと家に持って帰って家族で食べた。役員でなかったが（ホメイニ革命前の親米時代の）イランの少女，14，5 歳が二人だけで来た。日本のビートルズ（のような歌手たち）がどこで歌っているか最初に聞かれた。（当時，今と違い情報は簡単に手に入らない）分からなかったので後で兜虫（英 Japanese Beetles）を持っていけば良かったと思う。一人は英仏アラビア語をしゃべったが，もう一人は英語が駄目なので，（逆に）物静かな憂いを持つ気になる存在だった。何も大した親切はしなかったのに，ペスターチをくれた。ペルーの人は，記憶に一番良く残る。文部省のスポーツ教育の関係者だったが，最初役員扱いでなく，諸々の点でサービスが行き届かなかったのだろう。そのうち役員資格のＩＤカードを貰ってきて，何か言いつけた後，ＩＤカードを見せ，”Look at this.”か何か言った。「ハハ―」とかしこまって，”Yes, now you are an official.”色々な物を貰ったがそのたびに，用事を頼まれた。「これから回るアジア旅行の全部のビザを取れ」と言われたり，「自分達は体育会議に出てきたのだから会議の日程を教えよ」との命令であった。でも，それらは，どこに連絡しても皆終わっており，選手の練習参観もオリンピック前なので，うまくいかず，その旨，伝えると，「私達は，ペルーを出て，アメリカに行き，ハワイで過ごしている内に，終わってしまったのだから体裁を繕わねばならぬ」という訳で，「結果報告だけを集めよ」と言う。

（この役員宿舎には，4 人，後で日テレ？に入る別嬪で英語の舛田さんと，ドイツ語の岡田さん，東工大 4 年の英語通訳工藤さんとが居た）なかなか厄介であったが，暇な僕達には勉強だった。特に日本人を褒めてくれて，日本人の勤勉さや，オリンピック開会式の素晴らしさを称賛していた。客がもう一人加わった。シエラレオネの人だ。まだ誕生してから数年のアフリカの小国だ。文部省の役人だったが参加国ではないし，その委員長でもないので，渉外担当課長も「（役員扱いは）駄目だ」といくら言ってもらちがあかぬ。でも，彼は，昔の日本で言えば，柔道の嘉納治五郎のような人だと思った僕は，東京オリンピックに名高い，国際感覚あふれる，落語が得意という岩田渉外部長に会いに，あるパーテイ会場にタクシーに乗り駆けつけた。部長は，彼を Mr. Siera Leone と呼び，一分もかからずに，彼を招待者としてくれた。宿舎の仕事は暇で，じゃんけんで勝った僕と舛田さん（大学を卒業したら超人気番組「兼高かおるの素晴らしい世界旅行」の通訳として行きませんかと，民間テレビ局から葉書が来たことがある。一回電話しただけで，2 か月放っておいたら。駄目になりましたとの回答。少し残念。紹介してくれたの彼女だったのかな）が転出することとなった。

最初に派遣された会場は代々木の（世界遺産登録を呼びかけ始めた〈世界的建築家丹下健三による〉）屋内水泳場（もうプールとしては使用されていない）であった。収容力が限られるので，入り口に立って，他種目の選手，役員の入場を認めないとする仕事であった。（ローマ五輪は，他種目の選手役員入場ＯＫであった。2020 五輪でアクアテイックセンター＜近くの辰巳のプールに加えて＞本当に作る必要があるのか疑問に思うが，収容力 2 万人から，1 万 5 千人に変えるようである。折角作るのなら 2 万人で良いのかとも今思う）2，3 日前，選手が「わーって」訪れて，入り口を破って入っていったそうで，何しろ代々木選手村の隣で，ボクシングの選手だとか，バスケットの選手が，手を振り回したりするものだから，女子通訳では駄目で，入場係も危険を感じて逃げざるを得なくなっという。そんなわけで，男の通訳が来てくれて良かったと言う。［冗談じゃない

よ！］すぐ傍で，水泳競技をやっていたが，説明もないので，余り興味を引かなかった。（今，マスターズ水泳の末席を務めている私には，何てもったいないことをしたと思う。スター選手たちがいたのである。100 メートル自由形で 60 秒を初めて切って乗り込んできたドーン・フレイザー＜大会の花である＞。男子は，同じく１００自由形の米国ショランダー。私が調べた限り，同一種目で世界記録を 11 回達成したのは，この二人と，この大会でも五輪種目ではなかった２００メートル背泳ぎの田中＜現竹宇治）聰子しかいない。たしか，今でもフェルプスでさえ，同一種目としては達成していない。2020 東京五輪の水泳選手の活躍を願う）日本選手ふるわず（男子フリーリレーで一つだけ銅メダル。日本中が応援した，100 メートル背泳ぎで 4 位に終わった）田中選手の時はやはり，残念に感じた。100 メートル女子自由形でフレーザー達入賞者が記者達に取り巻かれている時，日水連の人に，「次の種目が終わって，次の選手が来るので出てもらえ」と言われ，光栄の至り，ドーン・フレーザーちゃんと並み居る紳士記者連に「ここを出るように」とアナウンスした。（フレーザーは，オーストラリアの国会議員とかになって，2 年前 50 メートル自由形を泳いだが, 48 秒もかかっている。「そこまで, 落ちたか」と聰子先生）

ここでの僕の仕事は, 主に門番のようなもので, 対象が外国人となると，中々厳しかった。というのは，午前の券と午後の券とがあったが，それを明示していない。午前の券で午後来たりして，鋭くかかってくるのであった。日本人というのは物静かで，せっかく得た券を諦め，「ああ，そうですか」で帰って行ってしまう。（それでも，今，それで，帰る人は，余りいないでしょうが）向こうは，日本人に言うだけの説明では決して納得しない。日本人は一般的に自分が悪いと思う時は，相手の悪さをつかないようである。

何しろ全部,「入場できません」と断るのだから感じが悪い。（2020 五輪，これはやめましょう。「経験に学べ」はこれですよ。杓子定規の日本人のやり方。言わなくても以心伝心。これは，他の文化圏では通用しません。「おもてなし」,「おもいやり」が大事）田中選手の次の 5 位に入ったイギリスの何とかという選手のお父さんがやって来た。券を沢山持っているのに，なぜか，この日の決勝の分だけない。「何とか入れてくれ」という。当たり前でしょう。事務員の断る言葉を訳し，向こうの言うことを訳すわけだから，こちらも，英語機械になってはいられない。結局，会場内には付き添いでついて行って，座席でなく，階段に座ってもらう。彼は，大声で観客席から娘の名前を呼ぶ。やっと，娘は気がついて選手席から上がって何かしゃべったが，父親は，選手役員の方にいけない。娘の試合をその日，じっと，一番端っこの席で準決勝，決勝と見ていたことだろう。

米飛込み選手の空中姿勢を 8 ミリに取りたいと来た米体操選手がいた。何とか入れてやり，感謝して帰って行ったが，彼には，再び巡り会えた。

体操場

千駄ヶ谷駅前の都器械体操場前で，その米体操選手は，2，3 人の人を前に券を売ろうとしているのを見つけ，どんな具合なのか訊いたら,「5 千円で，日本人から買ったが，いらないので，5 千円で売りたい」と言う。そこで,「額面価格で売らなきゃいけない」と言ったら，非常に憤慨して,「他の奴に売りに行く」と，去って行った。器械体操競技も見ているだけでは，説明がないので今一つ, 興味がわかない。（それは, 許されない。＜ここでも，自慢話＞なぜなら，中学校 3 年から始めた鉄棒，ローマ五輪の銀メダリスト「鬼に金棒，小野に鉄棒」＜現セントラルスポーツのトップの一人＞の小野選手に大塚の東京教育大学 (現筑波大学) での練習に，ある日，慶應志木校の新任の体操の先生にお供して，行かせて貰うと有名選手達が練習していた。世界的な小野選手が，私に,「君は，何年生だね。1 年生なら未だ遅くないね」と仰っていただいた。遠藤選手は金メダルに輝く。体操選手は 64 年五輪でも，皆，花形だった。会場近くの食堂で，日系米器械体操選手が食事をしているのを見た。日本の体操は，彼らには，高嶺の花である。「こういう人もいるのだ。

アメリカじゃレベルが低いよね」位の印象で話しかけもしなかったが，今は後悔している。Makoto Sakamoto は，後にコーチとして米国を80年代世界トップレベルの体操に引き上げ，その功績を称えられスポーツ殿堂に入る）

ボクシング会場

最後はボクシング会場に派遣された。入り口で仕事をしていた時，テレビに映って，中学からの友人に,「お前映っていたぞ。何やっているのだい」と言われた。（通訳服は目立つ。電車の中で,「君は，何の選手だね。卓球の選手かい] と聞かれたこともある）フィリピンの大きな太ったコーチのおじさんが，いつも，大声で（日本語で）「こんにちは」と我々の前を通っていたのをしみじみと思い出す。ボクシングの試合は，面白かった。ソ連 [当時] のヘビー級の大きな選手が凄く強い。米国代表は，6 フィート [180 センチ] 程度の普通の体のジョー・フレージャー。若い米女性が，彼に，サインを求めに来ていた。準決勝で強いソ連の選手を難なく仕留め優勝した。ローマ五輪のライトヘビー級優勝者は，カシアス・クレイ（後，イスラムに改宗し，ムハメド・アリとして，世界に君臨する。＜フレージャーは，後にムハメド・アリに勝つ。メキシコ五輪のヘビー級優勝者（負け知らずの）ジョージ・フォアマンは，チャンピオンに復帰したムハメド・アリに敗れる。フォアマンは，その後，次のチャンピオンを破り中年までチャンピオンを務める。まさに，世界のボクシングの歴史を直視することとなるとは当時思わなかった＞）

閉会式は行きたかったが，給与 1 日 2 千円を振り切り英語会の選挙に出て，ディスカッションのチーフをやることとなった。

通訳は他にもいた

善意通訳を務めた人も多かった。選手村で，別の仕事をした学生もいた。マラソンのアベベが許婚（いいなずけ）に上げる指輪が無くなって草むらを日本人総出で探し見つけたそうである。色々な形で，外国からの人たちに接し，東京五輪の思い出を作って欲しい。この機会に，英語習得をしっかりやることこそ，若者皆の使命と考え，実現できれば，それで良い。

多言語・多文化への挑戦

64 年五輪の際，カナダの二人の老婦人から,「ワゾーはどこにある」のだと聞かれた。暫くして,「ワゾーは，oiseau＜フランス語の鳥＞，大磯のことだ」と気がついた。大学 1 年生で，フランス語学びたてである。1964 年第 18 回オリンピック東京大会組織委員会がまとめた公式報告書が江戸川大学の蔵書にもある。それには，日本人通訳は，日本語と外国語一つしかできないので，具合が悪く，ヨーロッパから，多言語を操る通訳を 13 名採用したとある。組織委員会は，今の改装前の赤坂離宮にあった。彼女らの有能ぶりには，目を見張った。何しろ，数か国語が，電話を掛けながら，ほとばしるように出てくる。羨ましい。素晴らしい。ドイツから来た男性通訳とは，仲良くなって，彼はオートバイを借りたいとしていた。何しろ，英語が共通語でない時代，フランス人は英語など大嫌い。クーベルタンが始めた五輪の主要言語はフランス語，アテネフランセや日仏学院などから，急遽採用したとしている。又，各国言語に対応するため，各国大使館に応援を求め，主要言語でない言葉を話す人を集めた。さすがに彼らの評判は良かったようである。世界に 2 万もの言語がある。特別視された日本人公式通訳も，2 言語しか対応できない。私も，何度か，頼まれたりしても別の言語だとどうしようもない。「通訳は大会が見れないとか，文句を言って我儘だ」とかマスコミも手厳しい。

彼らからの刺激を受けて，それなりに，多言語を学ぶ意欲が生まれた。第 2 外国語のフランス語は，結構話すようになった。第 3 外国語のスペイン語は，キューバからの研修生 16 名の工場での

各部門の研修で，通訳をしなければならない。主語を省けるので，英語以上に同時通訳をこなすようになった。ポルトガル語は，スペイン語に近いし，ほぼ不自由なく操れる。江戸川大学学生で，今も時々テレビに出るシモネさんと，ポルトガル語で何度か話したこともある。ドイツ語やイタリア語は何とかなりそうである。学習して，少々の挨拶ができる言語は，ロシア語や，ギリシャ語。英語の祖語，インドヨーロッパ語は，そう遠くない言語である。数か月滞在すれば結構覚えられるはずである。又，日本人の武器は，中国語，韓国語ではないか。中国，韓国は私の時代近くて遠い国であった。しかし，韓国語は，語順が近い。ハングル表記となって遠く感じてしまうが，似ている言語とされる。中国を訪問して，嬉しいのは，発音はできないけれど，漢字が読める。新聞に書かれた内容がある程度伝わる。筆談も結構できる。これは，中国の人口を考えれば凄いことである。中国語の語順に慣れよう。英語の語順に近い。工場案内をする人で，日本語の語順で，英語で話す人がいた。これは惜しい。英語の語順で言わねばならない。英語を習得し，英語の語順に慣れれば，ヨーロッパの他の言語は，そう難しくはない。それと大事なのは異文化である。竹村健一氏の「日本の常識は，世界の非常識」は有名である。前述したが，日本人は，細かい規則を作るのが大好きだと思えてしまう。規則の為の規則が多い。窮屈である。開放的になろう。理解してあげよう。今，一度「おもてなし」よりもっと大事なのは「思いやり」ではなかろうか。

不幸にも，日本軍部は大戦へと突き進んでしまったが，日本人の伝統は，「戦いは起こさず，平和を守る」である。東京五輪は，その日本人の美徳を世界に広く伝播することではなかろうか。